

経済学史の意義とその方法 (三)

上 野 俊 樹

△目次▽

はじめに

一 認識の発展の動力について

- 1 経験的事実と既知の認識との矛盾
- 2 松村一人氏の認識の発展の動力の理解について
- 3 松村説の経済学への適用——富森虔児氏の経済学の方法
(以上、『立命館経済学』第二十七巻第一号、第三十巻第一号)

二 経済学史研究の意義

- 1 現実分析の有機的一環としての学説史的研究
- 2 経済学史的研究が「独立科学」か「補助科学」かという論争について
- 三 宇野説における経済学史の考え方
 - 1 宇野「原理論」の概要
 - 2 いわゆる「方法模写説」
 - 3 「原理論」形成史としての経済学史
 - 4 宇野説に従う人々の現代の経済学説の研究についての考え方(未完)

二 経済学史研究の意義

1 現実分析の有機的一環としての学説史的研究

いままで述べてきたことは、形式論理学的な意味で既知の認識や理論の論理的整合性・前後撞着としての「論理的矛盾」を追求するような解釈学的な経済学史研究は特殊な場合を除いて、一般に認識を進展させないということ、科学研究を前進させないということであった。

それでは、経済学的認識史すなわち過去の理論を対象とする経済学史の研究が解釈学的研究におちいらずに、したがって現実の分析をおこなう科学研究の有機的一環を担うためにはどうしなければならないのであろうか。

あらゆる科学はその固有の対象領域をもっており、この対象領域はその科学にとって固有の経験的事実から構成されている。科学的研究はその対象領域内の経験的事実を意識的にせよ無意識的にせよ人間の意識の外部に独立に存在する客観的実在として認めたうえで、それを分析しその法則性を発見することを任務としている。その場合に、科学的研究はその研究対象が、与えられた経験的事実が時間的、歴史的に変化しないものと限定してもその研究に本質的な影響を与えないような、あるいはこのように限定しても当面の認識の段階（研究の発展のレベル）においては研究に重大なさしきわりを生じないような特殊の自然科学的領域の研究を除けば、対象の現にある姿の内的本質を分析するだけではなく、対象の時間的経過にともなう変化を対象の本質的側面としてとらえて分析しなければならない。したがって、科学的研究は、第一に、現実存在している客観的な経験的事実の

分析（経済学的にいえば、いわゆる現状分析とよばれる部分である）からなり、第二に、「対象の発生史あるいは成立史、つまり対象の歴史の研究（経済学的にいえば、経済史の研究）からなる。

しかし、研究はこれらの側面からだけで構成されているのではない。科学は科学研究の長い歴史、理論の歴史をもっており、研究の出発はさしあたりは対象についての理論史によって与えられる理論的素材と、現実に存在し発展しつつある対象とをつきあわせることからじまる。もしわれわれが対象についてなにも認識していないならば、対象を分析し研究する要求などはまったく生じる余地はない。すでに述べたように、学習や研究によって獲得された客観的な経験的事実についての知識がすでにあり、しかもそうした知識が対象につきあわれ、それが経験的事実を十分に説明するものではないと感じられた場合に、対象についての新しい創造的な研究がはじまるのである。この意味で、客観的現実の分析に従事する研究は対象の法則性をとらえようとして苦闘した過去の理論的素材・理論史の研究をその前提としている。このことは同時に、新しい科学的発見を理論史のなかで説明するということをも意味している。新しい科学的発見がその発見に至るまでの経過を認識史のうゑで示されることによって、新しい理論の創造の必然性が認識の発生史のなかで証明されるのである。

発生史の方法にもとづいて理論史の研究をその本質的契機として含む科学研究活動の本性を、ヘーゲルは次のように述べている。

「行為は既存の素材を自分の前提として、それに対してはたらく。しかも、それを単に材料の付加、拡大によって増すのみでなく、本質的に加工し、改造するのである。各世代が科学において、精神的生産において現に有するものは、あらゆる前の世代が相ともに蓄積してきた相続品である。……この受け取った遺産は、精神の変形

する当の材料に引き下げられる。受取られたものは、こういうふうにして変化される。そうして加工された材料は、まさにこうして豊富にせられ、同時に保存されるのである。

既存の学問「哲学」を理解し、その上でそれに自分の手を加え、まさにそうすることによって学問をさらに発展させ、より高い立場に高めること、このことこそわれわれの、また各時代の役目であり、仕事である。われわれは学問を自分自身のものとすることによって、それを前にあったものとはちがった何かとして打ち出す。既存の精神世界を前提し、それを自分のものとして改造するというこの生産の本性のなかに、われわれの哲学が本質的に前の哲学との関連においてのみ生じうること、またそこから必然的に生じたということの意味がある」（『哲学史序論』、岩波文庫版、四一—四二ページ）。

ここでヘーゲルのいう「哲学」を科学研究と読みかえ、さらにヘーゲルの「絶対的方法」に批判的な立場から「既存の理論」の「加工」「改造」を理解すれば、このヘーゲルの文章は科学研究と科学史の関係、特殊的には経済学と経済学史の関係をまったく正しく表現している。科学とはその固有の対象の分析であると同時に、その対象に関する理論史が与える理論的素材の批判、加工・改造にほかならない。したがって、科学史や経済学史の研究は認識の発展にとって不可欠であるというにとどまらず、認識の発展は科学史や経済学史の研究との関連においてのみしか生じないのである。この意味で、それぞれの研究における理論史の研究を、研究のためのたんなる予備作業であって、具体的な研究の成果（発見された法則の叙述）のなかに姿をあらわさないものと理解したり、成立した理論を理解したりするための補助的研究とみなしたりすることは誤りである。

イギリス資本主義を対象としておこなわれたマルクスの研究の成果である『経済学批判』や『資本論』、ある

いはマルクスがその一部分を執筆した『反デューリング論』は認識の発生史をたどるなかで自己の理論がでてくる必然性を証明している。『経済学批判』では「第一章 商品」に対応する学説史的部分として「A 商品の分析の史的考察」が叙述され、「第二章 貨幣または単純流通」の「一 価値の尺度」に対応する学説史的部分として「B 貨幣の度量単位にかんする諸理論」が叙述され、さらに第二章の「二 流通手段」「三 貨幣」「四 貴金属」に対応する学説史的の部分として「C 流通手段と貨幣にかんする諸理論」が叙述されている。『経済学批判』では、たんに経験的・客観的事実を分析して、それをカテゴリーとして思惟のうえで固定するだけではなく、そうしたカテゴリーすなわち客観的事実の法則的把握がベティ、スミス、リカードウ等々の古典派経済学の経済学的分析の歴史のなから、その発展として出てこざるをえないことを認識史のうえでマルクスは証明しているのである。同じことは『資本論』についてもいえるのであり、経験的、客観的事実の分析の書としての『資本論』は、その第一部―第三部（現実の法則的把握の部分）に対応して、その第四部である『剰余価値学説史』を学説史的部分として含んでいるのである。かつて『剰余価値学説史』が、『資本論』の補巻であるかそうでないかという論争（時永淑「経済学史の研究方法」、『経済志林』第三十巻一号を参照されたい）があったが、それは『資本論』のたんなる付属部分ではなく、その必然的構成部分であり、『資本論』の第四部なのである。また、『反デューリング論』第二篇の「経済学」篇の第十章「『批判的歴史』から」はマルクスが書いたものであるが、この章は経済学史の叙述であり、この章は「経済学」篇の第五章から第九章までにわたって叙述されている理論的分析と経済的カテゴリーを理論史のうえで発生史的に証明しているのである。

このように現実の分析（客観的対象の歴史的研究、経済史の研究を含む）と理論史の研究が一体となっているのが、

マルクス主義的な科学的研究の特色であり、すべての科学的研究はこうでなければならないのである。

2 経済学史的研究が「独立科学」か「補助科学」かという論争について

(1) 以上の意味で学説史研究を客観的事実の分析的研究から切り離して、そのうえで独自の対象領域をもった自立的な研究であると考えるのは誤りである。ところが、遊部久蔵氏は学説史的研究が自立的な科学として独立することを要求する。

「私は従来のような学説史的研究が不必要というのではない。それが『資本論』の研究とならんでいまなお重要であることは十分みとめるのであるが、それだけでは現代において独立科学の地位を要求する経済学史として欠けているものがあるのではないかと思う」（『資本論研究史』、一八九—一九〇ページ）。

「経済学史が経済学の歴史的科学である以上、いつまでも『資本論』研究の補助科学的状態にとどまることなく独自の対象と方法とをもつべきであると思う。比較的最近このような新しい胎動がみられるようになってきたというのは言いすぎであらうか。私は内田義彦氏の『経済学の生誕』（一九五三年、未来社）などを念頭においているのである。そして経済学史のこのような可能性はやはり経済学プラン問題の進展のうちにみとめられるようになったのではなからうか。いまでは『剰余価値学説史』が『資本論』の補巻（もともとは第一部の補巻）であること、またマルクスが経済学史としてはむしろ経済学批判プランのつぎに『経済学および社会主義の批判と歴史』を予定していたことは誰しも認めるところである」（同前、一八九ページ）。

みられるように、遊部氏は学説史的研究が現実の分析と有機的な一体となって研究されなければならないし、

またマルクスがそうしているということを理解しないものであるから、経済学史を現実の分析と切り離されたところで独自の対象領域をもつものと考え、また『剰余価値学説史』を『資本論』のたんなる付属物として、補巻としてしか考えないのである。遊部氏は同時に経済学史の研究が独自の方法をもつべきであるということも主張しているので、この点についてすこし述べておけば、学説史の叙述の方法が事実の分析の結果を叙述する方法と異なっていることは、『剰余価値学説史』と『資本論』の叙述の方法が異っており、また『経済学批判』の学説史的部分とその商品や貨幣の法則的把握の部分の叙述の方法が異っていることから明らかである。『資本論』の叙述の方法がどのようなものであるかは、すでに見田石介氏の諸業績によって示されているのであるが、『剰余価値学説史』の叙述の方法は抽象的カテゴリーから具体的カテゴリーへと上向的に叙述されている『資本論』のカテゴリーの配列の順序にしたがって、それぞれのカテゴリーについての理論史が叙述されるという方法である。『経済学批判』ではこの学説史の叙述の方法の特色が際立ってよくみられるのであり、商品というカテゴリーに対応して古典派経済学の幾人かの経済学説のなかにみられる商品というカテゴリーに関する理解が「経済学批判」の方法にしたがって、つまり古典派経済学のカテゴリーの批判として考察されている。たとえば、スミスの学説が総体として、とりあげられて考察されるのではなく、客観的現実を分析した結果を叙述する部分におけるカテゴリーの配列にしたがって、そうしたカテゴリーに対応する部分がスミスの学説から分解してとり出されて、批判されるのである。これが学説史の叙述の方法の独自性である。^(注)

(注) 私はこの学説史の叙述の独自性について、かつて「経済学史の学び方」(『経済』一九七九年五月号)という論文の「四『経済学批判』の意味」「五 経済学史の叙述について」という章で述べているのでそれを参照されたい。

遊部氏はこういう経済学史の叙述方法の特殊性について特別に解しているわけではなく、ただ内田義彦氏の『経済学の生誕』を念頭において、学説史的研究が独自の対象と方法をもつべきであると主張しているのである。この内田氏の著作は「イデオロギー的解釈学としての経済学史の研究」あるいは「イデオロギー的認識の地盤からする科学的理論の再解釈としての経済学史の研究」というべきものであって、けっして経済学説史的研究が独自の領域と方法をもつことを科学的に証明したものではない。

むしろ、考えねばならないことは、経済学史が大学の講義カリキュラムのなかで、自立的な講義科目として扱われることによって、そのことからあたかも経済学史が現実の分析から遊離したところで自立的に存在する学問分野でもあるかのような仮象を生んできたことであつたし、また現在でもそうであるということである。この点は宇野弘藏氏の三段階論が戦前の東北大学での「経済政策論」の講義とかかわって生じてきたといわれていることと類似した現象である。講義科目としての「経済学史」の自立性は学生を教育するうえでの技術的な措置としてそうなっているだけであつて、こうしたカリキュラム上の自立的性から、経済学史的研究がそれ自体として自立性におこなえると考えればそれは誤りである。経済学史的研究は対象の諸側面に対しておこなわれる事実を分析する研究の不可欠のモメントとして含まれるのであり、財政学に対する財政学説史、信用論に対する信用学説史、もっと対象を細分化すれば商品論に対する商品論史（たとえば、マルクスの『経済学批判』のAの部分である「商品の分析の史的考察」、貨幣論に対する貨幣論史（たとえば、マルクスの『経済学批判』のBとCの部分）等々が学説史的研究である。学説史的研究は客観の対象の何らかの側面を分析しようという目的をもってなされなければ認識の発展に寄与することはできない。

(2) 横山正彦氏は認識の発展の動力が客觀的事実と既知の理論との間の矛盾にあること、既知の理論が客觀的事実を十分に説明しえないと感じた時に生じるものであることを、次のように正しく理解しておられる。

「もともと経済学は、他の社会科学の場合と同じように、歴史的発展過程にあるものである。一定の経済理論の成立・発展は、その国その時代の社会経済的情勢に根ざし、かならずやそれと一定の関連をもっている。経済学の発展過程における新しい理論の成立は、社会的経済的情勢の進展とともに、新しい問題が発生し、従来の理論ではその説明や解決が困難になった場合である」(『経済学史研究のあり方について』、『経済評論』一九五二年四月号、二五ページ)。

松村一人氏の『ヘーゲルの論理学』にみられるように、認識の発展の動力を概念内部の矛盾にもとめるヘーゲル主義が十分に克服されていないこの当時において、横山氏がこのように、認識の発展の動力を客觀的事実と既知の理論の間にある矛盾にもとめられていることは、正しい科学的立場であつたと思う。ヘーゲル主義の立場に立つ宇野説がこの時期前後から次第に抬頭して来たことを思えばなおさらその感が深い。しかし、他方では、横山氏は経済学史的研究を「補助科学」「刺身のつま」「単なる手段」として理解される平瀬巳之吉氏の見解に対して、経済学史的研究を「独立科学」とする立場から前述の引用文につづけて次のように反論される。

「しかし、経済学のこのような歴史的発展過程はけっしてそれ自体でおのずから明らかとなるものではない。それは、科学的な研究によってはじめて明らかにされうるものである。というのは、それぞれの時代における経済学の理論は、いずれもそれ自身として一応完結した外観を呈するだけでなく、しばしば絶対的な体系として自己の普遍妥当性を主張しているからである。ここに経済学史が、経済学をその成立・発展の過程において追求す

ることを任務とする一つの独立科学として成立する理由がある、とわたしは考えている」(同前、二五―二六ページ)。ここで横山氏のいわれている経済学の歴史はおそらく経済学的カテゴリーの発生史という意味での経済学史だけを意味しているのではなく、経済思想を含めて理解されるべきものであらうと思われる。なぜなら、この引用文に続く文章のなかで、『人口論』をはじめとするマルサスなどの経済学に対してイデオロギー闘争をすることも経済学史の課題であるといわれているからである。

なるほど、スミスやリカードウの経済学がどんな意義をもつかについては、マルクスが『剰余価値学説史』や『経済学批判』の学説史的部分でおこなっているように、学説史自体を対象とした批判的分析が必要であることはいうまでもない。しかし、横山氏が最初にいわれたように、認識の発展の動力は客観的事実と既知の理論との間の矛盾にあるのだから、経済学史を「独立科学」として、それ自体の内部でその成立・発展を追求したとしても、それはせいぜい既知の理論の論理的非整合を明らかにする(これ自体はすでに述べたように一定の科学的意義をもつではあるが)にすぎないであらう。スミスやリカードウの学説に含まれる経済学的カテゴリーが従来の学説に含まれるカテゴリーに対して発展しているのかどうかは、現実の事実の分析によってしかいうことはできない。スミスの投下労働価値論と支配労働価値論からなる二元的価値論に対して、リカードウの単純な労働価値論が経済学としての発展であるかどうかをいうためには、現実の事実を分析して、労働力という商品を見出し、剰余価値法則を発見しておかねばならない。剰余価値法則を発見しているからこそマルクスは、剰余価値を感知しているという側面からみれば、スミスの二元的価値論がリカードウの価値論に対してより科学的であると理解する。そして、他方ではリカードウの価値論は剰余価値や生産価格をその価値論にもとづいて説明できないという弱点

をもつものではあるが、基本的な原理をあらゆる現象に適用しようとした（この方法それ自体は科学的には不十分であるとはいへ）リカードウの学説の首尾一貫性がその諸モメントが基本的な、主要なモメントによって統一されて存在する資本主義的有機体を理解するうえで、スミスの二元的な方法に対してより科学的であるとマルクスは評価するのである。

横山氏は認識の発展の動力について正しく理解されているのであるから、その見地を貫ぬくことによって、現実の分析と経済学史の研究がどう関わっているのか、経済学史的研究が本来に発展するのはどういう方法に立脚すればよいのかを説明される必要があったのである。にもかかわらず、この点を深められないことによって、氏は学説史的研究を「独立科学」と考える誤った考えにおちいっておられるのである。

学説的研究を自立的な研究と考えるこうした傾向に対して平瀬巳之吉氏は次のように主張される。

「元来、学説史的研究というものは、それ自身が目的なのでなくて、原理構築のための迂回生産の手段であり中間生産物であろうと私は思っている」（『経済学における古典と近代』、一ページ）。

また、氏は前述した座談会のなかでは、経済学史的研究は「刺身のつま」であり「刺身」ではないという趣旨のことをいわれている（『経済学の論理と人間の問題』、『経済評論』一九五四年四月号）。こうした平瀬氏の見解は古典の解釈それ自体を自己目的とするような解釈学的な経済学史の研究や、杉本栄一氏のいわれる第一の型の経済学史の研究、すなわち「経済学説に関する話の泉式な知識の寄せ集め」（『近代経済学史』、二ページ）的経済学史の研究、あるいは現実の分析的研究と学説史的研究が有機的な一体になって研究がおこなわれることを理解しないで、経済学史がそれだけで自立的な学問として考える見解に対しては一定の意義をもっている。しかし、平瀬氏が学

説史的研究をたんに「迂回生産のための手段」「中間生産物」とみておられる点では不十分である。経済学史的研究は研究の成果のなかに、「理論的生産物」（ルイ・アルチュセール）のなかに、その必然的な一モメントとして含まれているのであり、この意味では経済学史的研究はたとえば『経済学批判』の学説史的部分のように「完成生産物」としてあらわれる。またそれは「迂回生産のための手段」ではなく、直接的な研究対象であり、ある科学的発見はいつでもそれがそれに関する理論史のなかでもつ位置と意味を示されてこそ真の発見といえるのである。以上のように、経済学史的研究を現実の分析から切り離して「独立科学」と考える見解も正しくないし、他方でそれをたんなる「補助科学」とみなす見解も正しくない。

三 宇野説における経済学史の考え方

1 宇野「原理論」の概要

戦後の経済学研究のなかで、独自でかつ特異な存在としてあるのは宇野弘藏氏の所説と宇野説に立脚した諸研究である。新カント派的な主観的観念論の一変種であり、実証主義である宇野説が、「マルクス経済学」として受けいれられて一定の影響を与えているが、こうした現実には経済学史の研究においてもみられるのであって、「経済学史の意義と方法」を論じるうえで、宇野説とそれに立脚する経済学史の方法はぜひとも検討しておかねばならない対象である。しかし、いきなり宇野氏の経済学史の方法を論じることとはできない。なぜなら、宇野氏の経済学史の方法は氏の「原理論」から発生したものであり、したがって「原理論」をまずみることが、それを

批判的に分析するための前提となっている。

宇野説の一つの特色は、「原理論」「段階論」「現状分析」の三つに経済学の研究を区分するいわゆる三段階にあり、宇野氏の経済学史は「原理論」形成史という意味をもつものである。

この宇野氏のいわゆる「原理論」がどんなものであるかについては、すでに見田石介氏（『宇野理論とマルクス主義経済学』、『見田石介著作集』第四巻、第五巻、等々）や林直道氏（『いわゆる「原理論」批判』、『マルクス主義経済学の擁護』所収論文）らによってすでに詳細に批判しつくされていると私には思われるので、あらためてここで宇野氏の「原理論」の考え方について詳しく再批判する必要はないものと思われる。そこで読者には、宇野「原理論」の批判の詳細については見田氏や林氏の前掲論文を参照していただくことにして、ここでは、宇野氏の「原理論」の考え方の大要について触れておくにとどめたい。

宇野氏の「原理論」は以下のようなものである。

資本主義は重商主義段階、自由主義段階、帝国主義段階の三つに区分され、「原理論」は自由主義段階において資本主義が「純粋な」資本主義に最も近似して来た状況から抽象される。現実の資本主義は前資本主義的な諸関係が社会の支配的な関係である重商主義段階において発生し、発展してくる。資本主義が自分の足で立ち、自分の存在条件を自分自身で生み出し、前資本主義的な「不純な」要素をとり除いて「純粋化」傾向を示すのが資本主義の自由主義段階である。しかし、この「純粋化」傾向も、帝国主義段階とともに逆転し、この段階では非資本主義的な「不純な」要素が本質的な特徴をなすようになる。この重商主義段階と帝国主義段階の中間段階が最も「純粋な」資本主義であり、この中間段階である自由主義段階において、その「純粋化」傾向が頂点に達す

るのであるが、この段階の現実の資本主義といえども、やはり「不純な」非資本主義的要素を残している。したがって、「原理論」は自由主義段階の資本主義から抽象されたとはいえ、その段階の資本主義も完全に「純粹な」資本主義とはいえないのであるから、それを「原理論」として抽象するためには、この段階に現実に存在する「純粹化」という客観的な傾向にのりかかって、思惟のうえで——現実には完全に「純粹化」しないのであるから——この「純粹化」を極点にまでおしすすめることによって与えられるというのである。そして、「原理論」においては、資本の原理はその存立の条件——宇野説においては恐慌も、資本の諸矛盾を現実的に解決しつつあたたかも永久的に発展するかのように叙述され、自分自身の存立の条件だけをつくり出し、その非存立の条件はつくりださない——のみで構成され、「原理論」は永久に同じ運動をくり返すものとして、くり返しの法則Ⅱ循環法則で構成されることになる。この純粹資本主義は全社会が商品経済をもって支配され、個々人も、個々の生産物もすべて商品経済的要因をなしており、要するに純粹資本主義は商品形態で一社会の全経済が処理されている社会である。だが、現実の資本主義社会は歴史性をもっており、この歴史性はもともと商品化するべきではない労働力が商品化しているところに資本主義の「無理」があり、したがって資本主義は死滅をまぬがれない、ということから説明される。

以上に概括した宇野氏の「原理論」の誤りは次の点にみられる。

第一 資本の一般理論——『資本論』——と、資本の特殊理論——『帝国主義論』——との分離という誤り。弁証法にいう一般と特殊についての全くの無理解である。

第二 客観的事物はそれ自身のうちに自らの存立の条件と非存立の条件をつくり出すということについての無

理解。弁証法にいう矛盾についての無理解である。

第三 「純粹化」傾向の逆転という主張は、全く事実反しており、「現実の資本主義社会において、資本制的關係が非資本制的關係を駆逐してゆくというその發展法則は、こんにちの帝国主義段階においても、世界のどの資本主義国においても、すこしも変わることなく作用しつづけていることは、あらゆる統計の示すとおりである」（見田石介『宇野理論とマルクス主義経済学』、二九ページ）。

第四 自由主義段階の資本主義でも「純粹化」傾向があるとはいへ「不純な」要素を残しており、帝国主義段階では「不純な」ものが本質的要素をなす。だから、現実の資本主義は『資本論』にもとづいては把握できない、あるいは『資本論』が明らかにする諸法則は現実の資本主義には貫徹しないというのが宇野氏の主張である。つまり、科学は現実を把握できないというわけである。

第五 特殊な経済的社会關係としての資本關係が商品關係に解消されて理解されていること。資本主義的生産關係の根本的法則である剰余価値法則が否定され、価値法則——これも氏の価値形態論等にみられるように科学的であるとはいえないのであるが——さえあれば、「原理」は構成できるというのがその「原理論」の根本的見地である。剰余価値を生むのは「人間の力」（社会科学と弁証法、『思想』一九六六年一月号、九一ページ）であるとするような資本主義の根本的法則を誤り解する見解である。

第六 「原理論」はくり返しの法則で構成されているのであるから、「原理論」で説明される法則によっては、資本主義の他の社会への転化も証明できないし、剰余価値法則のように、価値法則を否定する法則をその「原理論」のなかに入れることはできない。しかし、現実の資本主義は他の社会から転化してきたし、また別の社会へ

転化するという歴史性をもつのであるから、その「原理論」は「永久的に同じ運動を繰り返えしつつ発展するものであるかの如くして、その運動法則を明らかにする」(傍点は筆者——『経済学方法論』、一五〇ページ)ことになる。したがって、資本主義の現実であるその歴史性は思惟のうえでは、そしてまた、その「原理論」のうえでは把握できないのである。この点を、第一から第五までに述べてきた点をつけ加えて宇野「原理論」を理解すれば、それは結局マックス・ウェーバー的な「思惟の構成物」「理念型」ということになる。この点については第2節であらためて検討する。

第七 資本主義の歴史性を氏が「労働力の商品化に無理がある」ということに求める点である。「もともと商品品になってはならない労働力が商品化している」から資本主義は死滅するというのが宇野説である。しかし、労働力が商品化すること、すなわち農奴やさまざまな色合いをもって存在する小所有者あるいは旧支配層のなかから賃金労働者に転化するものが生まれるということは資本主義の基礎であり、このことによって狭隘な生産力基盤に立つ封建制を打破して資本主義が発展し、それは生産のための生産、消費をかえりみない生産という形態で生産力を発展させ、その歴史的使命を果すのである。資本主義がその歴史的使命を果し終えた時、労働力は商品化することはなくなるのである。だから、労働力が商品化することは一つの合法的な過程であり、宇野氏がいうように決して「無理」でもなんでもないものである。氏の「労働力商品化無理説」は事実判断ぬきの価値判断であり、科学の代わりに道徳をもちこむものである。

第八 最後にもう一つ。宇野氏はこういう「原理論」の真理性は決して事実によって検証されるものではなく、その論理的整合性、無矛盾性こそがその真理性の検証を規定するという。

「原理論の真理性の検証は、その理論的構成の首尾一貫性以外にないことを指摘しておこう。個別的経験は勿論のこと、革命的実践さえもそれによって原理をくつがえすというものではない。むしろ反対に原理を基礎にして説明せられるのである」（旧『経済学演習講座・経済原論』、一一―一二ページ）。

この点では、唯物論の根本的見地が否定されている。事実の探究によってその研究の真理性を明らかにしないのであるから、宇野氏は、第一章「認識の発展の動力」で述べたように、ヘーゲルの弱点である「絶対的方法」の否定的側面を継承しているのであり、氏の方法はヘーゲル主義的である。

2 いわゆる「方法模写説」

宇野氏の経済学史についての考え方を知る場合にもう一つみておかねばならないのは、その「原理論」の科学性を保証するものである、と氏がいう「方法模写説」である。しかも、この「方法模写説」は「科学とイデオロギー」の問題にも深い関係をもつので、ここでとくにとりあげて述べておくことにする。氏はこの「方法模写説」によって、階級的・主観的立場ではない客観的な立場が保持しうると考えている。この「方法模写説」は、原理は対象を模写するだけではなく、（認識の）方法をも模写するのであり、認識主体はただ客観的過程が抽象するものをたんに反映すればよいのであるから、認識主体の抽象作用に主観的なものが入りこむわけはなく、こうして抽象作用の結果としての理論的成果の客観性が保証されるというものである。唯物論にいう真理の客観性をこのように考えるのである。

「私はかつて経済学の原理論は、単に対象を模写するのではなく、方法自身をも模写するものであるといった

ことがあるが、それは対象の模写が同時に方法の模写でもあることを意味するものにほかならない。それはすでに繰り返して述べてきたように原理論の対象をなす純粹の資本主義社会なるものが、単に現実の資本主義社会から主観的に抽象して想定されるのではなく、資本主義の発展そのものが、客観的に純化作用を有しているものとして想定されるものであるからである。方法自身が客観的に対象とともに与えられるのであって、対象に対して何等かの主観的な立場によって立向うわけではない。

経済学の原理論の対象をなす、純粹の資本主義社会が、自然科学における実験室の対象に対比せられるべきものであることは、すでに屢々述べてきたことであるが、……純粹の資本主義社会が吾々の何等かの主観的立場によって抽象され、想定されたものではなく、客観的に資本主義の発展の内に認められる傾向として想定されるものである……」（『経済学方法論』、一六四—一六五ページ）。

この宇野氏の「方法模写説」に対しては、すでに見田石介氏が『宇野理論とマルクス主義経済学』のなかで詳細に批判的検討をおこなっているので、私は簡単にこれについてふれておきたい。

この引用文にみられるように、宇野氏によれば、経済学的分析や抽象を頭のなかでおこなってはならず、認識の客観性は現実の資本主義自身が何か生きもののように自分自身で抽象、分析するものを、人間の頭脳が反映した場合にだけいえるのだというのである。しかし、分析や抽象は人間がおこなうのであり、そうした行為は認識主体と絶対に切り離すことはできない。そしてこの分析や抽象こそが科学にとって本質的なことであり、人間の認識がこれを放棄すればそれは現象を眼に映するがままにまったく無批判的に記述する実証主義に転化せざるをえないのである。たんに経済的土台の眼に映するがままの事実の認識のうえでの反映は宇野氏の説とは反対に、

科学的認識ではなくイデオロギー的認識である。「方法模写説」によって宇野氏は科学的認識をイデオロギー的認識と同一視することになるのである。

見田石介氏がいうように、「マルクス主義の唯物論は、反対に生きた全体をその根底まで抽象し分析して、その本質的な諸要素を抽出し固定しこれを再構成することによって、現実の内的な生命を模写する点にその本質がある。したがってマルクス主義はそうした実証主義をこれまで一度も主張しなかった」（『宇野理論とマルクス主義経済学』、一一五ページ）のである。

宇野説に立脚する降旗節雄氏は宇野氏の「方法模写説」をうけて、ウェーバーの方法の立場から「宇野氏の所説とウェーバーの『理念型』は同じ方法にもとづいていないか」という世良晃志郎氏の主張（「マルクスとウェーバーとの対話——ウェーバー研究の進展に寄せて——」、「思想」一九六七年一月号）に反論される。すなわち、マルクス主義もなんらかの「主観的観点」あるいは特定の「認識関心の方向」によってつくり出された見解であり、そのかぎりにおいてそれは相対的で、主観性からまぬがれることはできず、絶対的で客観的な科学性は主張できないといわれる世良氏の見解に対して、降旗氏は次のようにいわれる。

「たんなる研究者の『価値理念』や『認識関心の方向』から離れて、対象自体の発展過程が対象の理論的把握の方法自身を規制するという、このマルクスによって確立された経済学を科学たらしめる独自の方法を、宇野教授は、経済学においてはたんに対象を模写するにとどまらず、対象を模写する方法をも模写せざるをえないという表現において定式化されたのである」（『科学とイデオロギー』、一二九ページ）。

ウェーバーが科学が主観的にのみ意味をもち、認識主体によって価値を付与された個性記述的なものにすぎな

いと考えたのは、彼が社会現象の背後にまったく法則性を認めなかったからである。これがウェーバーの誤りの一つである。しかし、降旗氏はウェーバーのこうした誤りを指摘することなく、第一には法則性はみてもそれはたんに循環法則であり、弁証法的法則ではなく、第二に、ウェーバーに屈服して分析・抽象をおこなえば主観的で科学ではなくなると考えられるのである。そこで、宇野氏の「方法模写説」の援けをかりて「原理論」の世界へ逃げこむのである。つまり、「方法模写説」と「原理論」の存在の有無が宇野説とウェーバーを区別するわけである。宇野氏は次のようにいう。

「ウェーバーはすぐれた経済史家だとは思いますが、彼には経済学の原理がなかったのではないのでしょうか。マルクスを原理の点でどう考えるかを明らかにしていれば、あんなことはいわなかったと思うのです」（『社会科学としての経済学』、一六五ページ）。

つまり、方法模写説によって構成された経済学の「原理論」があるかないかがウェーバーと宇野氏の違いであり、ウェーバーがマルクスの『資本論』を「原理論」として解釈していないことが宇野氏とウェーバーの違いであるというのである。しかし、「方法模写説」自体が抽象・分析を否定する実証主義的方法であり、また第1節で八点にわたってのべたように氏の「原理論」の方法は何らウェーバーの理念型的方法と変わらない。宇野氏とウェーバーが違うのは、新カント派的方法でもって『資本論』を解釈し、「方法模写説」にもとづく「原理論」をもつかどうかという点でのみ異なるにすぎないのである。宇野氏もウェーバーも同じように主観的観念論と実証主義的科学を提唱しているということでは同じ科学の方法を提唱しているのである。

3 「原理論」形成史としての経済学史

以上に宇野氏のいわゆる「原理論」と「方法模写説」について検討し、宇野説の非科学性を指摘したのであるが、それではこうした非科学的な「原理論」と実証主義的方法から、どのような経済学史についての考えが生じるのであろうか。

まず第一は、『資本論』でもって宇野氏のいう「原理論」が完成したというわけではない——なぜなら、『資本論』にはイデオロギー的要素が混入しているからである——が、しかし、完成の基礎を与えたのであるから、経済学史は『資本論』で終結するという主張である。

「経済学の種々なる部門の研究にも歴史があるわけで、それぞれ研究されなければならぬし、またされてもいるだろうが、経済学史というのは、『資本論』で一応終結するものとしてよいのではないか。それは原理論の体系化の歴史だ。経済学は、おそらく非常に特殊のことと思うが、原理論を完全に体系化しうる学問で、経済学の発達ということも、この体系の完成ということがその目標となっていたわけだ」（『経済学の方法』経済学セミナー(1)Ⅴ、八六―八七ページ）。

「マルクスの『資本論』を準備するものとしての経済学の歴史が経済学史、その内には古典派と共に俗流経済学も入る。そしてそれは原理論が形成される過程をなすわけだ。もちろん僕としては『資本論』も原理的に完成したものとは考えないが、しかし完成の基礎を与えてくれたので、学説史はこれで終りにしてよいと思う。そのあとの経済学の歴史は、もはや原理の形成に役立つものとはいえない」（同前、八二ページ）。

このように宇野氏においては、『資本論』を準備するものとして経済学の歴史」が経済学史なのである。しかし、『資本論』もイデオロギー的見地あるいは発展史的見地を混入させている不十分なものであるから、結局『資本論』からイデオロギー的要素を除去した氏の「原理論」を準備するものとして、経済学史が意義づけられているのである。宇野氏独自の「原理論」の形成に役立つ経済学の歴史が経済学史なのである。『資本論』以降の経済学は、「段階論」的事実や「現状分析論」的事実を対象とするのであり、「不純なもの」を本質とする事実を対象とするのであり、そうであるから、そうした事実を対象とする経済学は「方法模写説」によっておこなわれるのではない。『資本論』以降の経済学がその科学性を保証されるのは、宇野「原理論」を基準としている場合だけであり、したがって、『資本論』以降、宇野「原理論」が登場するまでのすべての経済学は、そして宇野「原理論」が出現した後にはその「原理論」を基準としないすべての経済学は科学的ではないのであり、そういうものは種々なる部門の研究として歴史的に存在はしているが、科学としての経済学の歴史にははいらないというのである。

こうした見解は第1節と第2節でその非科学性を指摘した「原理論」と「方法模写説」とから生じてくるのである。しかし、「原理論」と「方法模写説」が誤っているのであるから、こうした見解が成り立たないことは明らかである。

第二の点は、前記の引用文にみられるように、宇野氏が『資本論』で終結するという経済学史のなかに古典派経済学とともに俗流経済学も入るということについてである。

マルクスの「経済学批判」の方法は経済学の方法であると同時に、経済学史の方法をも含むものであるが、こ

の方法にもとづく科学的な経済学史は経済的カテゴリーの歴史的叙述である（拙稿「経済学史の学び方」△『経済』一九七九年五月号▽の「四『経済学批判』の意味」を参照されたい）。ところがマルクスのいう俗流経済学というのは、「ただ外観上の関連のなかをさまようだけで、いわば粗雑な現象のもっともらしい平易化と、ブルジョアの自家需要のために、科学的な経済学によってとくに与えられている材料を絶えず繰り返して反趨するのであるが、そのほかには、自分たち自身の最良の世界についてのブルジョア的生産当事者たちのありふれた、ひとりよがり

の見解を体系づけ、屁理屈づけ、永遠の真理として宣言するだけで満足している」（『資本論』、大月書店普及版第一卷第一分冊、一〇八一—一〇九ページ）経済学のことであるのだから、この俗流経済学が「経済学批判」の方法にもとづく経済的カテゴリーの叙述史である経済学史のなかにはいりこむことは一般にはありえないのである。広い意味での経済学史、つまり経済思想史をも含んだ経済学史（マルクスが、一八五八年二月二日付けのラサールあての手紙のなかでいっている「全体としての経済学と社会主義との批判や歴史は、別の著作の対象としたほうがよいだろう」という場合の「経済学と社会主義との批判と歴史」はこの広い意味での経済学史を意味している）においては、俗流経済学もはいるのであるが、この広い意味での経済学史は経済的カテゴリーの批判史としての経済学史（『剰余価値学説史』や『経済学批判』の学説的部分）が書かれたのちに、それを前提としてはじめて書くことができる。なぜならば、経済思想史というのは、狭い意味での学説史研究を含んだ現実の分析がすんでのちにその真実の姿を明らかにすることができるのである。土台とイデオロギーの上部構造は相互作用するとはいえ、究極的にはイデオロギー的の部構造は土台によって規定されるのであって、それぞれの経済思想がどんな意味をもつか、イデオロギーとしての俗流経済学がどんな意味をもつかは、土台の分析（これには狭い意味での学説史的研究が含まれる）によってこそ

明らかとなる。

以上のことから、宇野氏が『資本論』で終結する経済学史——この考え自体が正しくないのであるが——のなかに俗流経済学がはいるという考えは、二つの点で誤っている。一つは、「経済学批判」の意味を正しく理解していないことであり、すなわち（狭い意味での）経済学史が経済的カテゴリーの批判的叙述であることを正しく理解していないことである。もう一つは、経済思想史を含んだ広い意味での経済学史を経済的カテゴリーの批判的叙述としての経済学史と区別しておらず、経済思想の意味は土台の分析によって明らかになることを正しく理解したうえで、経済思想を含んだ経済学史の叙述について説明していない点である。

さらに指摘すべきことは次のことである。宇野氏にとっては経済学史の研究というのは、「自分の理解する経済学の原理に対する考え方を自分で考え直してみる」（同前、八六ページ）ことに役立つだけのものにすぎない。しかし、この役立て方も、自分の「原理論」を確証するようにスミスやリカードを読むというものである。

宇野氏がスミスやリカードを体系的に論じた著書・論文は私の知るかぎりでは、角川全書『経済学』（上・下）だけであると思われるが、このなかでの宇野氏のスミスやリカードの理解は次のようなものである。

すでに述べたように、宇野氏の『原理論』は商品形態で一社会の全経済が処理される純粹資本主義を想定し、この純粹資本主義から「抽象」された循環法則としての価値法則でもって構成されていた。宇野氏はこの見地からスミスを考察する。この著作において氏は、二元的価値論というスミス経済学の根本的な問題については、分解価値論と構成価値論をすこし論じるなかでわずかに触れているにすぎない。スミスのこの二元的価値論は資本主義社会においてはより多い労働とより少い労働が資本家と賃労働者の間で交換されることによって、「価値法

則のその反対物への急転」(マルクス、『剰余価値学説史』大月書店、第一分冊、七四ページ)を彼が感知することによって生じたものであった。しかし、氏は「価値法則を否定するものを価値法則から展開するわけにはいかない」(『社会科学の根本問題』、一九五ページ)のであるから、氏は「価値法則のその反対物への急転」を決して説明するとはできないのである。だから氏の経済学史はスミスの根本的な問題をさけてとおる経済学史とならざるをえないのであった。

宇野説の立場から、経済学史を研究しておられる時永淑氏はスミスの二面的価値把握について次のように述べられる。

「賃金は、もともと商品としては生産されない人間の『労働力』の代価であって、それを誤って『労働の価値』としてとらえ資本と賃労働との関係を単なる交換過程に解明してしまうならば、社会、存続の物質的基礎をなす労働生産過程が、資本主義的には人間の労働力をも、商品形態をもつて、売買する特殊歴史的な生産関係をもつて、資本の価値形成増殖過程という、顛倒した過程として行われる、ということは、解決不可能である」(時永淑編『経済学説史』、七八ページ)。

この引用文の傍点部分は日本語として恐しく意味のとりにくい難解な文章であるが、要するに時永氏のいわれることは労働力が商品形態をとり、その代価が賃金であるというのが資本主義的生産であり、それが他の社会に対するその特殊性であるということであろう。

スミスはこの点を理解しないために、「剰余価値の源泉そのものを理論的に解明する道を閉ざした」(同前)と氏はいわれるのである。しかし宇野説においては、前述したように剰余価値の源泉は「人間の力」であって、宇

野氏は生産手段の資本主義的独占と飢えの強制法則によって労働者が剰余労働を強いられ、自己増殖する価値である剰余価値が創造されるという剰余価値法則が否定されている。

「労働力を商品としてその価値によって買入れて、使用価値として実現すれば、必ず剰余価値がえられるというにしても、それは価値法則によってそうなるので別に『剰余価値の法則』があるわけではない」（『経済学の方法』経済学セミナー（1）』、一二〇ページ）。

したがって、宇野・時永両氏とスミスが違うのは、もともと商品としては生産されない人間の労働力が商品化し、こういう「無理」が支配するところに資本主義の特殊性を宇野説においてはみているのに、スミスはそれを見ていないということにある。なるほど宇野・時永両氏が指摘されるように流通過程上の事実、すなわち労働者は「労働」を売るのではなく、「労働力」を売るのであるということの指摘は、マルクスの経済学と古典派経済学とを区別する一つの根本的なことであり、古典派経済学に較べてマルクスの経済学が現実の分析において大きく前進したことを示すものである。スミスは「労働の価値」という表現においてははあるが、労働力が商品として売買されるという流通過程上の事実については知っているのであるが、スミスは労働と労働力の区別をおこなわなかったのであり、この点がスミスの弱点の第一である。と同時に、スミスはこうした流通過程上の事実をけっして「無理」とはみずに、合法的なものともみている点では、宇野氏よりはるかに科学的である。

しかし、二元的価値論におちいらざるをえなかったスミスの弱みはこの点にだけかぎられているわけではない。スミスの二元的価値論は、資本主義的現実においては「より多くの労働とより少い労働とが交換される」ということ、すなわち剰余価値の源泉を感知したこと——この点はリカードウに対する彼の強みであるが——に由来す

るのであるが、スミスはどこにおいてもこの剰余価値をカテゴリーとして認識のうえに固定しておらず、どんな特殊な経済関係が剰余労働を剰余価値に転化するのかを分析していない。この点が彼の弱点の第二である。スミスは価値法則と剰余価値法則の間にある「一つの裂け目」（『剰余価値学説史』、大月書店、第一分冊、七三ページ）を感知したのであるが、価値法則が「結果においては事実上廃棄され」（同前、七四ページ）る剰余価値法則を価値法則の基礎上で叙述するためには、たんに「労働力が商品」として交換されるという流通過程上の事実を知っただけではおこなえない。スミスは弁証法を知らず、事態をたんに事柄の同一性のうえで分析するという単純な分析的方法——宇野氏のヘーゲル主義よりもはるかに科学的であるが——に立脚する。ところが、この「価値法則の剰余価値法則への転化」いいかえれば「たんなる貨幣の資本への転化」についての叙述は「認識過程で必然的におちいる認識上の矛盾」を犯さないではおこなえない。このことについてはすでに第一章2節(イ)で述べておいた。したがって、弁証法的叙述方法をしらなければ、「価値法則のその反対物への転化」は叙述できないわけである。これがスミスの第三の弱点である。

宇野氏や時永氏のスミスについての説明は宇野「原理論」が前提となっているのであるから、「原理論」の誤りがそのままスミスの理解に再現し、第二、第三のスミスの根本的な弱点は批判できなくなっているのであるが、それだけではない。剰余価値法則が「人間の力」によって発生するというのであるから、こういう経済学の根本的法則を把握しない点では、宇野説は古典派経済学のレベルを超えるものではない。

リカードウについての宇野氏の理解も根本的な弱点をもっている。リカードウの投下労働価値論はスミスの二元的価値論のもつ問題がどういう問題であるかを理解しないことをその特色としている。スミスは剰余価値の源

泉を感知するがゆえに、投下労働価値論と支配労働価値論を区別したのであるが、リカードウはこのスミスの区別をスミスが「同意義のものである」（リカードウ『経済学および課税の原理』、日本語版『リカードウ全集』第一巻、一三ページ）と考えていたと述べるのである。ここにリカードウ経済学の決定的な弱みが存在するのであるが、この決定的な点について、宇野氏は角川全書『経済学』の「リカードウ」の項目において何ら説明していないのである。時永淑編『経済学説史』の「リカードウ」の項目は小黒佐和子氏が執筆されたものであるが、この解説も宇野氏の角川全書『経済学』の解説とほぼ同じであり宇野氏の弱点をそのまま再現するものとなっている。

このように、宇野氏は剰余価値法則を把握しないという点で決定的な弱点をもち、この弱点のゆえにこそブルジョア経済学であるスミスやリカードウの経済学と同一の地盤のうえに立っている。これがマルクス（科学的経済学）と宇野説の一つの根本的な違いである。だから、宇野氏は経済学史をみて、すこしも自分の「原理論」を考えなおしていないのであるが、こうした宇野説の経済学史の理解の誤りは主要にはその「原理論」の誤りからくるのである。しかし同時に、スミスやリカードウの経済学の理解の誤りが非科学的な「原理論」を生んでいることを指摘しておかねばならない。

宇野氏の経済学史の考え方について述べるべき第四の点は次のことである。

氏は一八世紀の経済学者は現実の分析からだんだんと離れて、現実の分析をおこなった一七世紀の経済学者がすでに与えている理論的素材を思惟のうえで再構成したが、その再構成の方法は資本主義が自ら抽象・分析するものを模写するという方法であった（「方法模写説」と主張する。

「いうまでもないことであるが、『われわれが与えられた国を、経済学的に観察する場合に』しても、経済学

の理論的研究の発達段階によって種々異った関係にある。『例えば一七世紀の経済学者たちは常に、生きた全体、すなわち人口、国民、国家、諸国家、等々をもって始めた』のであるが、一八世紀の経済学者の場合は、すでにこれと同一視することはできないであろう。一七世紀の経済学者にとっては、その分析の対象をなすものは『一個の混沌たる表象で』もあつたであろう。そして『彼等は常に分析によって、僅かの規定的な・抽象的な・一般的な諸関係、例えば分業、貨幣、価値等々を搜し出すことに終った』ともいえるであろう。そこでは現実的分析を目標としながら、かかる分析に役立つべき理論的概念の把握が行われていたのである。しかし一八世紀の経済学者になるともはやそうはいえない。それと同時にイギリスの経済学的分析ということから漸次に離れて、経済学そのものの理論的展開をなすという方向が明確になって来ている」（『価値論の研究』、七―八ページ。なお、引用文中の二重括弧のなかは、マルクスの「経済学批判・序説」△邦訳『経済学批判要綱』、大月書店、二二ページ▽から宇野氏が引用したものである）。

「前にも述べたように前方への旅も、後方への旅も、二百年に亘る多数の経済学者によって繰り返し行われて来ている間に、後代の経済学者にとっては、すでに得られたる抽象的概念が利用せられると共に、この抽象的概念からの理論的展開は、漸次に具体的なる分析と分離して、理論的体系をなして来たとは考えられないであろうか」（同前、三八ページ）。

一八世紀の経済学者、たとえばアダム・スミスの『諸国民の富』は宇野氏によれば、資本主義が産業革命によって今まさに自分の足で立とうとしている社会を、封建的要素を多分に残しながらも資本主義が支配的な関係となりつつある当時のイギリス社会を分析したものであるというよりも、スミス以前に存在した経済学者の与える

理論的素材を思弁のうえで再構成したものであるというのである。つまり、事実の分析と理論体系をつくるということが分離してきたというのである（以上、『マルクス主義経済学の擁護』、四九ページを参照されたい）。

こうした氏の見解は経済学の方法としての上向法・下向法の非科学的な理解と結びついている。氏はこの経済学の方法について次のようにいう。

「ペティに代表される一七世紀の経済学者が、下向過程を主としたのに対して、スミス、リカルドによって代表される一八、九世紀の経済学者は、上向の方法による経済学の理論の体系化を進めてきたというわけである。もちろん上向の方法をとった経済学者も、単に与えられた概念規定だけでその理論的展開をなしたわけではない。一七世紀の経済学者のように下向過程をそれぞれに繰り返したというのではないであろうが、それまでに獲得された概念を、資本主義の発展によつて与えられる事実を材料としながら、科学的により精確に規定し、展開しつつ、理論的体系化を進めてきたものといつてよいであろう。体系的に首尾一貫した理論として始めて客観的な法則性を確証するものとなるのであって、その点が『科学的に正しい方法』とせられる所以をなすのである。そしてそれは対象とせられる資本主義自身が、益々純粹の資本主義社会に近接しつつ発展してきたという事実によつて客観的に基礎づけられるのであった。いいかえれば資本主義の発展とともに理論的体系化も完成に近づいてきたのである」（傍点は筆者——『経済学方法論』、二二ページ）。

つまり、宇野氏のいう上向法というのは上向過程において分析をおこなわない一方的な上向という方法である。マルクスのいう上向法にもとづく上向過程では、叙述は単純なものから複雑なものへと順次上向的におこなわれるのであるが、上向の一步ごとに事実の分析がふくまれているのである。分析によって単純なカテゴリーを確定

すると、今度はその単純なカテゴリーをある新しい事実とつぎ合わせ、単純なカテゴリーでもってその新しい事実が説明できないことを示し、そこでその新しい事実を分析して次のより複雑なカテゴリーへと叙述を展開するというのがマルクスのいう科学的な上向法である。宇野氏も一見すれば、この引用文の傍点部分にみられるように、上向過程において事実を分析しているかのようにいうのであるが、この引用文の傍点部分は第2節でのべた「方法模写説」の立場からこういうことをいっているのであって、決して上向法に事実の分析が入りこむことをいっているのではない。一八世紀の経済学者は、経済学の理論的体系化にあたって、資本主義の「純粋化」傾向によって資本主義が自ら抽象・分析することを模写し、反映したものである。だから、一八世紀から一九世紀のマルクスの『資本論』までの経済学史は資本主義の「純粋化」傾向を方法的にも模写するということである。つまり、一方では一八世紀の経済学者は事実の分析をしないということ、したがってかれらは一七世紀以前の経済学者が与える理論的素材を思弁的に再構成したにすぎないという主張があり、他方では、この思弁的な再構成は資本主義がその「純粋化」傾向によって自ら抽象・分析することを模写するという主張が存在するのである。理論的素材を思弁的に再構成するというヘーゲル主義と実証主義である「方法模写説」の結合が宇野氏の方法であって、氏はこの方法的見地から『資本論』に至るまでの経済学史を考察するというわけである。

しかし、この理解はあまりにも経済学史の実際とはかけ離れている。たとえば、リカードウの貨幣論をとってみても、それは一九世紀初頭、ナポレオン戦争中のイギリスにおける金の製造価格をこえる市場価格の騰貴、紙幣の価値減価、および物価の上昇という事実を分析し、そうした事実を理論的に把握しようとして研究されたものであった。

リカードウの貨幣についての理解は結局のところ貨幣数量説的なものではあったが、しかしその貨幣論は事実をたえず前提し、事実を分析しようとして苦闘した研究の産物であり、けっして思弁的な思惟の構成物ではないし、また実証主義的な現象的事実のうえをはいずりまわっているものでもない(リカードウの貨幣論については、拙稿「デイヴィッド・リカードウ」(中)、(下の1)〳、『経済』一九八一年七月号、八月号を参照されたい)。

以上のような意味で、一八世紀から『資本論』に至るまでの経済学の歴史を現実の事実を分析しない経済学とみる氏の理解は誤っているし、経済学史の実際をみていないものである。

第五点は以下のことである。宇野氏は第二章で述べた経済学史的研究が「独立科学」か「補助科学」といふ論争を次のように「タワイのないこと」として一蹴する。

「独立科学としての経済学史というのはどうだろう。そんなにきばらなくてよいでしょう。しかしそれが『刺身のつま』というのはまた言い過ぎだ。経済学の原理を確立するには経済学の歴史を前提しなければならぬわけで『独立科学』たることを要求するのもおかしいが、『刺身のつま』にするのもおかしい。マルクスが従来の経済学の歴史を徹底的に研究して、『資本論』を書いた事実をみればそんなタワイのないことはいえないと思う」(『経済学の方法』(経済学ゼミナール(1)〳、八五ページ)。

しかし、宇野氏はマルクスがなぜ従来の経済学の歴史を徹底的に研究したのかということの意味については、本当のところは理解していない。

現実の経済学的分析の有機的な一環として学説史的研究が不可欠であるということは、すでに第二章第1節で述べた。すなわち、それは現実を分析するうえで研究の有機的な構成部分として、スミスやリカードウらの古典

派経済学あるいはマルクスやレーニンをはじめとする現代の様々な経済学を研究すること、そしてそれらの学説を理論的素材として現実の事実につき合わせることによって認識は発展するのであり、学説史的研究は認識の発展のための有機的なモメントをなしているということであった。しかし、宇野氏にとっては、こういう意義をもった学説史的研究は全く問題にならないのである。『資本論』の発展や修正をいう場合も、『資本論』を事実とつき合わせてその発展や修正をいうことが氏にとって問題であるのではなく、ただ『資本論』という素材の枠内で「方法模写説」と結合した悪しきヘーゲル主義にもとづいて、それを解釈しなおすことが氏にとって問題なのであった。そして、そうした宇野「原理論」の、そのまた素材として『資本論』以前の古典派経済学と俗流経済学を使用して、その「原理論」の正当性を証明しようというのが宇野氏の経済学史である。

だから、そもそも学説史的研究が「段階論」的事実や「現状分析論」的事実の研究といかに関わっているのかということとは宇野氏の問題意識にはいってこない。宇野氏本人にとっては、「段階論」や「現状分析」は学説史的研究と無縁のところに与えられているのであるから、この論争を「タワイのないこと」と一蹴することができたのである。

ところで、宇野氏は、「原理論」を完成することがその仕事であったのだから、その仕事に付随するものとして学説史的研究の意義と学説史的研究領域を限定的に与えておけばよかった。しかし、すでに完成した「原理論」を与えられたものとして受けとったうえで経済学史を研究する人々にたいしては、この宇野氏の経済学史の考え方は一つの困難をもたらしこととなっている。そこで節を改めて、この点を論じることしよう。

4 宇野説に従う人々の現代の経済学説の研究についての考え方

経済学史を「原理論」形成史と理解すれば、『資本論』以後の経済学を学説史としてどう扱えばよいのか、宇野氏のように経済学史を『資本論』で終結するとすれば、宇野説を踏襲しながらどのように経済学史的研究を進展させればよいのかという問題が、宇野派の経済学史を研究する人々にとって一つの困難な問題として浮び上ってくる。

まず第一に帝国主義段階における経済学説をどう扱うかということである。資本主義が「純粋化」傾向を示している時に『資本論』は書かれたのであって、マルクスは帝国主義段階における「純粋化」傾向の逆転現象を知らないで、『資本論』を書いたのであり、そのために、それは「原理論」として完成したものにならず、発展史的な側面が『資本論』に混入することになった。したがって、「段階論」からふりかえってみることによって、『資本論』を「原理論」として純化できると宇野氏はいう。

「マルクスも資本主義の発展が益々純粹の資本主義に近づくものとして原理を展開しながら、この資本主義の発展が決してそういうものではなく一定の発展段階では逆転するということを知りえなかったために、反って発展史的な面が原理的な展開の内に混入するということになっている」（『経済学の方法／経済学セミナー（1）』、二三ページ）。

「むしろ今日では原理を資本主義一般の原理とし、これに対して段階論を区別するというのがマルクスの方法を継ぐことになるのではないだろうか。マルクスでは資本主義の発展に金融資本時代がないので、原理論の展開

がそのままに発展の法則に照応するという面が強くなったのではないか」(同前、二六ページ)。

こういう宇野氏の説明を前提にして、鎌倉孝夫氏は「段階論」的事実の研究それ自体が媒介的に「原理論」の完成に寄与すること、したがって段階論的研究が「原理論」形成史としての経済学史であるといわれるのであり、氏は何とか帝国主義段階論の事実の解明を学説史的研究でもあると説明することができたことになった。

「帝国主義段階論の解明も、原理論に対する段階論の形成を通し、ふり返って原理論自体の対象と方法を明確にさせようという点で、原理論形成史としての経済学史の対象とされなければならなかったのである」(時永淑編『経済学説史』、二二七ページ)。

このように、第一次大戦期ぐらいまでの帝国主義段階論の研究が学説史的研究でもあるという説明がなされたのであるが、しかし帝国主義段階論にあらわれる諸経済学説の研究がどのように帝国主義段階論の事実の研究と関わっているのかということについては何の説明もされてはいない。第三節で述べたように、現実の事実の分析にとって学説史的研究の意義とは一体何かということ、この経済学史的研究の本質を問題にすることはヘーゲル主義的な(概念の自己展開説的な)宇野説にはそもそも存在しない。だから、鎌倉氏においても、こうした問題は全く意識されていない。それだけではない。前の引用文にみられる帝国主義段階論の解明というのは、その段階の経験的事実をまずイギリス金融資本とドイツ金融資本に類型化し、この二つの類型を基準にして各国の資本主義をみていくというものであった(この考えの誤りについては、見田石介『宇野理論とマルクス主義経済学』、六五―八四ページを参照されたい)。だから帝国主義段階論の解明というのは、やはり帝国主義段階論の事実の研究についていわれていることであって、帝国主義段階論(段階論的研究の対象となる時期)の経済学説について直接にいわれ

ているのではない。ところが、次の引用文をみると、現状分析的段階で現代の諸学説をとりあげること——この段階の事実の分析が問題とされているのではない——が、どういう意味で「原理論」形成史としての学説史的研究になるのかというように問題がたてられている。つまり、鎌倉氏においては事実の研究ということと、学説の研究ということとの区別が明確にされていないのである。鎌倉氏の所説をみる場合にこの点を注意しておくことが大切である。

ところで、第一次大戦期以後の時期、すなわち現状分析の段階における諸学説の検討が「原理論」形成としての学説史的研究であると主張することは鎌倉氏といえどもなかなか困難なことであると認めざるをえない。というのは、学説史的研究というのは「原理論」形成史のことであるのだから、すでに「原理論」が与えられている場合に、現代の諸学説の検討がどのような意味で学説史的研究であるかをいうのは非常に困難であるからである。鎌倉氏はこの困難を率直に告白されている。

「原理論形成史の観点からすれば、現代の経済諸学説を網羅的に取り上げることが意味がない。その学説が、原理論の完成、確立に何らかの関わりをもつかぎりで、その学説を取り上げる必要がある、ということになる。

しかし、こうした基準の上で、現代にあらわれた経済学説を取り上げるのが、経済学史の方法だとしても、実際のところこれは相当に困難な課題となる。すでに基本的には原理論も帝国主義論も確立したもの（あるいは、さういふもの）としてあり、それを基準にして現状分析がなされるのであるから、逆に現状分析自体が、原理論、段階論の完成、純化を直接もたらすものではないことは明らかである。とすれば、現代の諸学説を、経済学史の対象とすること自体が問題とされねばならないことになる」（同前、二二七ページ）。

宇野氏の経済学史の考え方にしたがえば、まさに鎌倉氏のいわれるように、現代の諸学説を「原理論」形成史の観点から取り上げなければならないことはいうまでもない。それではどうすればよいのか。鎌倉氏はつづけて次のようにいわれる。

「段階論の形成は、原理論を純化・確立するものとなった。そこで現状分析が反面、段階論の確立をもたらすものとなるならば、その関連を通して原理論の確定にも関連するということはできる」（同前）。

前述したように、一方では「現代の諸学説を取り上げるのが、経済学史の方法である」といわれながら、他方ではこの二つの引用文にみられるように「現状分析」すなわち事実の分析がどういう意味で学説史的研究であるか、といわれるのである。諸学説の研究と事実の研究が混同されているわけである。この混同は「段階論」的研究の段階での事実の研究と学説の研究の混同の場合と同じである。そして、鎌倉氏はこの混同を意識しないままに、現状分析的研究が「段階論」の確立をもたらし、そうした「段階論」の確立が「原理論」の確立をもたらすのであるから、現状分析的研究（現代の経済学説の研究を同時に意味している）もこうした二重の媒介をへて「原理論」形成史としての学説史的研究でもあるといわれるのである。

しかし、もともと宇野氏の考えは「経済学史は『資本論』を準備するものであり、それは『資本論』で終結してよい」ということであつた。ところが、他方では宇野氏は「原理論」の形成のためには「段階論」の研究が必要であつたといつて、両者の相互前提関係を一面においては認めており、この関係を鎌倉氏は利用されて、「段階論」的研究も学説史的研究であるといわれたのである。だから、明らかに、宇野氏においても鎌倉氏においても、学説史的研究は『資本論』までで終結していない。さらに、「現状分析」的研究も学説史的研究であるのだ

から、なおさらのこと学説史的研究は『資本論』までで終結してはいない。ここに単純な前後撞着があることは明らかである。

宇野説においては、「原理論」と「方法模写説」から経済学史を理解しなければならず、「原理論」形成史の観点から学説史をとりあげねばならず、そこで経済学史は『資本論』で終結するといわねばならなかった。そしてこの考えを前提にすれば、現代の諸学説をとりあげて、それを研究することを学説史的研究であると本当はいえないはずである。しかし、現代の諸学説への言及、検討なしに経済学史のテキストをつくることはまことに都合の悪いことであり、こういうことをしないでテキストをつくれば、宇野説は現代的問題を分析している現代の諸学説に何の関わりももたないのかという批判をうけることは必死であろう。そこで、宇野氏の経済学史の考え方と何とか辻褄を合わせたいという批判をうけることは必死であろう。そこで、宇野氏の経済学史の考え方の見地なのである。しかもその辻褄の合わせ方は主観的観念論にふさわしいやり方で、すなわち事実の研究と学説の研究を混同したままでやろうというわけである。こういう経済学史の考え方では、学説史的研究は何ら現実の科学的分析の発展に寄与するものとはならないであろう。

以上に検討してきた宇野説における経済学史の考え方についても一つ指摘しておかねばならないことは、それが宇野氏に独自の「科学とイデオロギー」についての考え方から生じているということである。しかし、「科学とイデオロギー（思想）」の問題、あるいは経済学的には「経済学史と経済思想史」の問題はそれ自体が相当大きな問題であり、内田義彦氏や平田清明氏らのいわゆる「思想史的方法による経済学史研究」の意義に関わる問題でもあるので、別の論文であらためて検討したいと思う。